

殺人事件

著作権の関係で
写真は削除

概要：この事件は、1月12日の12時半過ぎに、老人ホーム内で、被告人の甲田乙彦(68歳)が、被害者の平田兵吉(69歳)をナイフで刺して殺害した事件である。検察側と弁護側で事実関係について争いはないが、被告人に殺意があったのか、それとも怪我を負わせようという意思しかなかったのかについて主張が対立している。

被告人 甲田乙彦(68歳)

◆事件の背景

被告人は、30代で妻と死別して以来身寄りがなかったこともあり、3年前に40年勤めた地元の製麺工場を退職してすぐに、甲乙老人ホームに入所した。被告人は、身長165cm、体重52kgと小柄な体格であり、老人ホームの職員は、気弱で人の良い性格だと証言している。他方、被害者の平田さんが建設現場を退職してこの甲乙老人ホームに入所したのは、1年前である。平田さんは、身長182cm、体重118kgと大柄な体格であり、短気で、職員や他の入所者ともいざこざを起こしている。入所してすぐに平田さんは、被告人の気の弱い性格に付け込み、食事や賭け事の代金を支払わせる、無断で被告人の物を借用する、人前で被告人の人格を無視した発言をする、頭をはたく、小突くなど横暴を振るうようになった。見かねた職員が注意すると、被告人が否定できないのをよいことに、平田さんは「俺ら、親友やねん。」と言い逃れた。平田さんの前では何をされても不快な様子を見せなかった被告人だが、2週間前に、友人と飲みに行った際に、珍しくひどく酔い、平田さんの話になると、「今はなめられてるけどな。本気になったら、あんなやつブスッと一刺しで一発だ」と、まじめな顔でいっていたと被告人の友人の一人が証言した。

◆事件当日の動き

事件当日の12時半過ぎ、仲間との賭けマージャンで5000円負けた平田さんが、そばにいた甲田さんに「甲田、ちょっと払って。今、金ないねん。」と声をかけた。すると被告人は珍しくハッキリした口調で「嫌です」といった。平田さんは、少したじろいだが、「何言うてんねん。ちょっと貸しといて言うてただけやろが」と声を荒げ、被告人に近づいていった。被告人は、ポケットから刃渡り9.5センチの折りたたみナイフを取り出して開き、両手で構えると、平田さんは「刺せるもんやったら刺してみろや。根性なしのくせに」と言って、さらに被告人に近づいて、手を振り上げた。周りにいた人は、「おい、やめろ」と声をかけたが、被告人が、「俺をなめるな」といって、目を瞑って、構えていたナイフを前に突き出した。ナイフは、平田さんの胸の中央部に、10cmの深さで突き刺さり、心臓に達していた。平田さんは、その場で崩れるように倒れて失血死した。目撃者は、平田さんが倒れた後、被告人はおびえたように震えながら立ち尽くしていたと証言した。

◆取調べ、および公判(裁判)での様子

その後の取調べで、ナイフは3日前に、近所の釣具店で購入したものであること、平田さんは旅行のため事件当日まで休んでいたことがわかった。また、友人の証言から、被告人が平田さんのために払った金額は1年間で36万円以上であることが分かった。被告人は黙秘をしていたが、公判(裁判)では「平田さんのせいで、貯金が減っていて将来が不安だった。今度こそは、自分の主張を通そうと、ナイフを持っていた。ナイフを見せたら、少しは驚くと思ったが、逆に迫ってきたので恐怖を感じたので、無我夢中でナイフを突き出した。殺そうとまでは思っていなかった」と証言した。

◆検察官の主張：

被告人は、平田さんの日ごろの態度に対する怒りを蓄積し、犯行に及んだのである。被告人が被害者の平田さんに殺意を持っていたことは、知人に話していた「ブスッと一刺しで一発だ」という言葉、および事前に鋭利なナイフを用意し、それを、胸の中央という生命の危険性の高い場所を相当深く突き刺したこと、そして平田さんが倒れた後も看護をしようともせず立ち尽くしていたことから明らかである。被告人の公判での証言は、刑を軽減するための嘘である。これらから、被告人には少なくとも、死んでしまってもよいという殺意、すなわち「未必的な殺意」があったといえる。被告人に対する被害者の態度は、好ましいものではないが、それが被告人を殺害しても良い理由にはならない。また、被害者が、被告人に暴力を振るおうとしていた経緯を考慮しても、被告人が被害者を殺害するにまで至ったのには情状の余地はない。そのため、殺人罪、7年を求刑する。

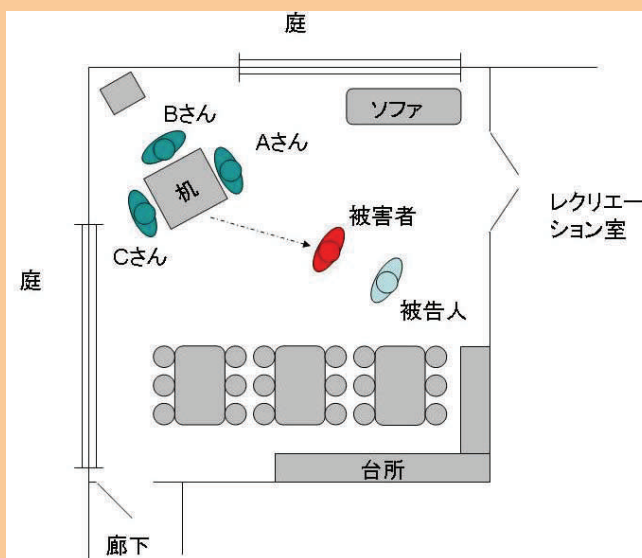
◆弁護人の主張：

被告人は、平田さんの横暴をやめさせようと威嚇するのが目的であり、殺意はなかった。体格、腕力で劣る被告人は、平田さんの横暴な態度をやめさせ、人として最低限度の尊厳を得ることを目的としていた。被告人が被害者を傷つけるに至ったのも、被告人がナイフを出したにも拘らず近づいてきた平田さんに対して引っ込みがつかなかったためである。胸に深く刺さったのは、向かってくる平田さんに恐怖を感じ、それを止めようとして、目を瞑ってナイフを突き出した被告人の手の動きと、向かってくる平田さんの動きが一致したために起こった不幸な事件である。その証拠に、その不幸な結果に、平田さんはショックを受けて、ナイフを放し、呆然と立ち尽くしていたのである。被告人が事件前に友人にもらしていた「ブスッと一刺しで一発だ」は、酒を飲んで気が大きくなった際に、友人の前で見栄をはるために言ったものであり、実際には殺意までは含まない考えるのが適切である。よって、被告人の行為は、傷つけようとして、誤って死に至らしめてしまった「傷害致死」と考えるのが適切である。

◆裁判官による教示

検察官は、殺そうという「確定的な殺意」ではなく、死んでしまってもかまわないという「未必的な殺意」があったと主張しています。皆さんは、裁判員として、検察官の主張するように「未必的な殺意」があったのか、それとも弁護人が主張するように、殺意がなく、傷つけようとして死に至らしめてしまった「傷害致死」であったのかについて判断してください。

なお、罪のない人を罰することを避けるため、刑事裁判には「疑わしきは被告人の利益に」という原則があります。この原則では、少しでも「疑い」（「もしかしたら殺意がなかったのではないか？」など）がある場合には、被告人に有利なように判断することになっています。

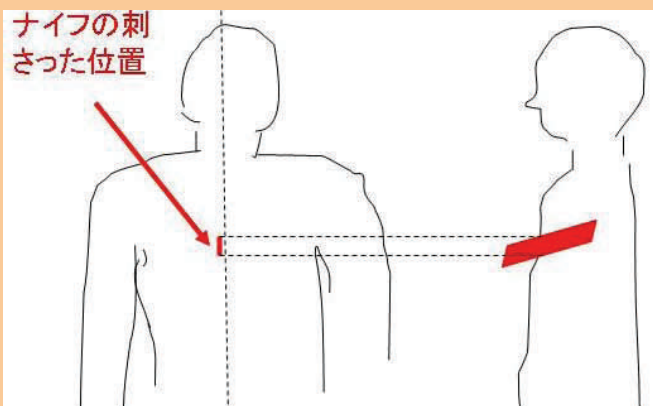


◆現場付近の様子

事件が起こったのは、リビングと呼ばれる老人ホームの一角であった。職員は、他の入所者をつれてレクリエーションルームへ移動していたため不在であり、現場には、入所者5人しかいなかった。

血痕に残った足跡から、殺害当時の被告人と被害者の間隔は、約80cmであり、右利きの被告人は左足を前に出した姿勢であったことが分かった。

近くにいたCさんの通報によって警察が到着した際、被告人は、うつむいて椅子に座っていた。



◆ナイフの様子

ナイフは、歯を下向きにした状態で、胸骨のすぐ左側を、やや上方に向けて、幅1.2cm、深さ10cmで刺さっており、肋骨の隙間をえぐって、刃先は、心臓をほぼ貫通していた。遺体は、ナイフが刺さった状態で発見された。